

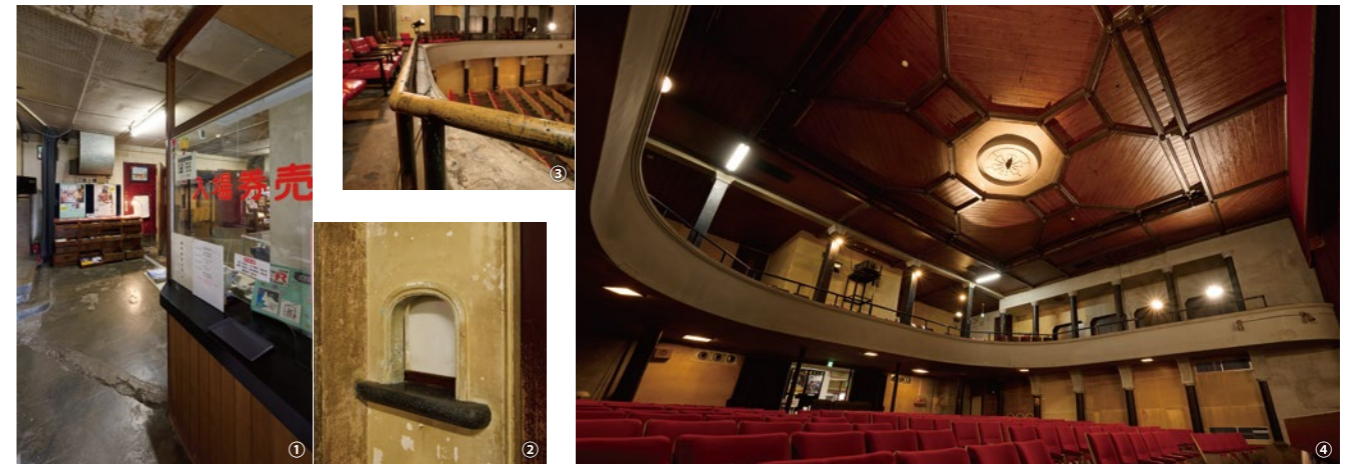
高田世界館

110年余、娯楽の発信拠点として親しまれる擬洋風建築の映画館

新潟県上越市の高田世界館は、明治44(1911)年開業の芝居小屋を前身とし、映画ブームを背景に大正5(1916)年、映画館となった。開業当初から注目された擬洋風の建物は時代を超えて受け継がれ、今も娯楽と文化を発信している。登録有形文化財。近代化産業遺産。



芝居小屋として開業し1世紀を超える歴史を刻んだ高田世界館は、趣ある当初のしつらえを受け継ぎ、現役、最古級の映画館となった。



①客は右の入場券売場からエントランスへ進む。②通路左に下足置場があり、この窓から下足を預けて入館していた時代もあった。③木製手すりを回した2階席。④江戸時代の高田藩主・榊原家の家紋「源氏車」を中央に飾った天井。客席は計約180。芝居小屋だったため2階席や窓がある。今はイベント時にも活用する。



階段室から見た2階映写室(中央奥)。光量が少ない古い映写機時代は1階に映写室があった。50年以上、繰り返し修理して使われている35ミリフィルム映写機。随時、フィルム上映会も実施する。奈落に残る回り舞台の装置。円形に切り込まれた舞台を回すためのたくさんの車輪とレール、それらを支えるレンガの柱が見える。

明治41年、旧高田市(現、上越市)に陸軍第13師団が誘致された。人口が増えたまちは娯楽施設や飲食店が建つてにぎわい、明治44年に芝居小屋「高田座」も開業。地域で最も早く建てられた西洋風の建物は、当時の新聞に「ルネッサンス式白垂の大劇場」と紹介されている。その約5年後、活動写真の人気を受けて常設の映画館「世界館」へと業態を変更した。外観正面にはルネッサンス建築を思わせる半円アーチの窓や、四角い上げ下げ窓を配置。建物上部のバラベットの天端を直線・曲線の組み合わせによるユニークなデザインとする。

西洋風の装飾が目立つ一方、バラベットの向こうには寄棟、切り妻の瓦葺き屋根が並び、建物は木造。館内も天井は板張り、板の組み方に和風の工法がみられたり、ドリス式のような黒い丸柱、角柱を立てたりと和洋のデザインが混在している。「世界館平面図」という古い図面が残っているが、描かれた時期や設計者は不明で、細部の指示がない部分も多い。西洋建築の情報が十分でない時代に地元の大工が施工したとされ、こうした擬洋風の造りになったと考えられている。映画館の開業当初、客席は現在のような椅子

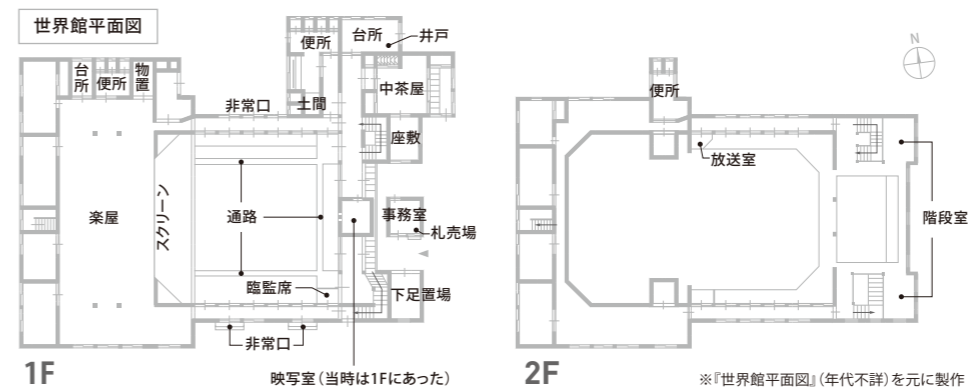
席ではなかった。「世界館平面図」に椅子席の表示がなく、後年、芝居小屋の客席(土間が板間、または畳敷き)から椅子席になったとされる。芝居小屋の舞台は、映画用スクリーンを設置した後も一部が残された。また、回り舞台の装置も奈落で名残を留め、長い歴史と娯楽の移り変わりを感じさせる。開業から110年余、高田世界館の建物は今も維持、活用され、文化と娯楽の発信拠点となっている。今後も一般上映に加えて、観客参加型の上映スタイルや舞台・2階席を使ったイベントなど、多様な試みが続けられる。



①雁木(がんぎ:写真左)の奥が現在の入り口。手前右は旧切符販売所。②大正15年頃。「常設世界館」の看板がある。



①個性的な形のバラベットが特徴のファサード。②看板建築のようにバラベットが立ち上がり、後ろに瓦屋根が続く。③開業した明治44年頃。半円アーチ窓が見える。



用語説明

【バラベット】屋上の外周に外壁に沿って立ち上げた腰壁。
【ドリス式】古代ギリシャ建築の列柱様式の一つ。柱に礎盤がなく、柱身はエンタシスと呼ばれる膨らみを示し、簡素な柱頭をもつ。ドーリア式とも。
【看板建築】道路側の前面を看板のように仕上げたことから名づけられた建築様式。大正期から昭和初期にかけて、東京の神田商店街を中心に流行。

新潟県上越市本町6丁目4-21
協力:高田世界館

